

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26301004

研究課題名(和文)持続可能な縮小都市の「かたち」を創出する都市社会システムの研究 - イトリノを事例に

研究課題名(英文)A study on urban social systems that creates a sustainable "form":Torino

研究代表者

矢作 弘 (Yahagi, Hiroshi)

龍谷大学・公私立大学の部局等・フェロー

研究者番号：40364020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円

研究成果の概要(和文)：『トリノの奇跡--縮小都市の産業構造の転換と再生』(2017年2月藤原書店)を研究成果として出版することができた。それに先立ち、毎年度末に「地域開発」に成果論文を投稿してきた。また、学会での成果発表にも努めた。

この研究は縮小都市デトロイト研究を継続して行われた。いずれも自動車産業都市として繁栄し、その後、衰退を経験している。さらに、21世紀を迎え、それぞれ再生の道を歩み始めている。2都市の衰退事情、再生風景の比較を通し、脱工業化+縮小都市のよい研究になった。また、トリノに立派な研究ネットワークを広げることができた。

研究成果の概要(英文)：We could publish a book "Miracle of Turin: Restructuring and re-birth of post-industrial cities" (Fujiwara Publishing Company 2017). Also we made several contributions (study papers) to a magazine (Areas Development) at each year-end of research. And we published our research achievements at academic societies.

This research study was made as the next project of <Detroit Study>. Torino and Detroit had enjoyed their prosperity as a car-industry cities, and experienced their deterioration. But both of Torino and Detroit have started recovering from their deterioration since the beginning of 21st century. We could make a good study through their comparative study( the reasons of deterioration and their landscapes of rebirthing). Also we could expand our research networks in Torino.

研究分野：都市研究

キーワード：縮小都市 トリノ 脱工業化 自動車産業都市

1. 研究開始当初の背景

世界の都市(人口10万人以上)の1/4が人口を減らしている。縮小都市が21世紀都市の基本的パターンの1類型になる。これまでの都市研究/都市政策は、都市が成長/発展することを自明/当然とし、1)さらなる成長の条件、2)あるいは成長を抑制・管理するための研究、及び政策展開であった。その意味で都市研究/都市政策は、パラダイムの転換を求められている。

一般的に縮小都市は「広範囲で人口の減少に直面し、危機的状況を発症しながら経済社会構造の転換を迫られている人口高密度都市」(K.Pallagst et al.[2007] *The Future of Shrinking Cities*)と定義されている。都市縮小の要因は、1)グローバル下の産業構造の転換、2)居住空間、都市機能の郊外化、3)出生率の低下、などである。この傾向は、フォーディズム型の旧産業都市で顕著である。「縮小都市」が先進諸国に共通する現象であることが都市計画/地理学分野で指摘されて以来(P.Oswalt[2006] *Shrinking Cities*、Langer & Endlicher eds.[2007] *Shrinking Cities*等)、空間計画、過剰住宅、都市財政、高齢化する地域社会などに関する個別分野で「都市縮小」に注目する研究が国内外で発表されるようになった。しかし、縮小過程全体を学際的に理解し、どのような都市社会システム(ガバナンス)が崩壊し、それを代替する新たな、弾力性のある都市社会システムが形成されようとしているのかについての研究は少ない。ここで「都市社会システム」は、都市政府を含む、内外の官学民ステークホルダー(利害関係者)が育む関係性を指している。

したがって本研究の目的は、旧産業都市の縮小が長期間続くことを前提に、1)縮小都市が直面する危機を分析し、2)持続可能な縮小都市の「かたち」を描くことである。「持続可能性」は、「環境負荷を軽減しつつ、一定レベルの「生活の質」を継続的に再生産できること」を指し、「かたち」は、単に建築/都市計画上の空間に止まらず、経済/文化/社会的な諸活動の枠組みも含意している。

研究代表の矢作は、「縮小都市デトロイト」の研究を続けてきた(「科研」2011-13年度)。デトロイトは過去半世紀に人口を半減させ、生産基盤を喪失。デトロイト市政府は2013年7月、財政破綻を宣言した。しかし、一方で新しい世紀を迎えたところから「都市再生の胎動」を感知するようになった。科研では、こうした再生の動きに注目し、1)(汚職や政争のため)デトロイト市政府は機能不全を起こしているが、2)民間基金が資金力/調整力を発揮し、機関(大学、総合病院、文化施設)+企業+NPOが、多様な場面で重層的に協働するネット

ワーク(=都市社会システム)を構築している、3)しかも、いずれの再生も自生的な取り組みであることを確認した(日経新聞「経済教室」2013/8/7、「甦るデトロイト-ウッドワードアヴェニューの再生」『地域開発』2013/8等)。換言すれば、市場が再生の揺籃器として機能している。デトロイト研究を通し、1)同じモーターシティの縮小都市トリノが1990年代以降、急速に再生し、人口も増加に転じた、2)都市政府が戦略プラン(期2000-10年、現在期目)を構築し、指導力を発揮、内外のステークホルダーと協働する都市社会システムを効果的に機能させている事実を知った。EU(欧州連合)の構造基金政策も、トリノ政府の再生戦略を資金面から効果的に支援している。都市再生のメカニズムがデトロイトと対照的であることに注目し、比較研究に意義を見出した。

2. 研究の目的

先進諸国の旧産業都市が共通して経験している「都市縮小」に注目し、縮小都市の持続可能な「かたち」を描き出すことを目指す。「都市縮小」を単なる衰退とは捉えず、むしろ「環境負荷を軽減する方向で都市を再編/再生する機会になる」という仮説に立脚し、そうした機会を育む都市社会システムは果たしてどのような内容かを明らかにする。「かたち」は、単に物理的、可視的な建築環境に止まらず、「人々の暮らし方/働き方」の総体を含意している。研究方法では、縮小都市の構造的な危機を象徴するハード/ソフトの「空き」(空き住宅/工場跡地/希薄化する地域社会の人間関係/雇用機会の喪失など)を、「都市再生につながる素材」に転換/活用する都市社会システムに注目する。海外調査対象には、フィアットのある縮小都市イタリアのトリノが90年代半ば以降、「戦略プラン」を基に官学民協働の枠組みを構築し、急速に構造転換している状況を取り上げる。

トリノは2000年以降、人口が増加に転じ、脱フィアット(ワン・カンパニー・タウン)色を鮮明にしながらか経済社会の構造転換を促進し、「トリノの奇跡」と称賛されている(A.Winkler[2007] *Turin City Report*)。その構造政策は、1)市政府が戦略プランを策定して大学や企業、NPOを先導し、2)資金面では、EUの構造資金を活用したものである。戦略プランは、ステークホルダーの参加と協働を基本思想に据えている。トリノでは、「都市政府が都市再生の水先案内役」「EUが資金面で推進力」になり、他のステークホルダーと協働する都市社会システムが機能している。

本研究では、縮小都市に関し下記の理論仮説に立脚し、デトロイト研究で得た知見を活用、発展させる。財政破綻後のデトロイト再生の動向も、常時、文献(地元紙、

論文)を通して追跡調査する。

**a)** 縮小都市は、人口のみならず、資本の増加も鈍化/減少する環境下にある

**b)** 以前のように人口の流入、民間/公共投資を期待できない

**c)** 半面、経済社会の市場化/グローバル化の影響下、逆に人口と資本の移動は促進される

**d)** こうした人口動態、経済環境の変化が構造的な危機を生み出し、縮小都市にハード/ソフトの「空き」を生み出している (The Financial Times 2013/9/12: 特集「米国の Vacants to value」等)

**e)** この「空き」を都市再生の要素に転換/活用する都市社会システムは、それぞれの都市の歴史的、地理的、社会的な固有性 すなわち、領域的な特色を反映したものになる

1) 20世紀後半期にトリノが衰退した時期の、フォーディズム型都市社会システムはどのようなものだったのか、旧弊の都市社会システムを代替する新たな都市社会システムが如何に機能するようになったか (戦略プランを精読し、その実装化のプロセス、成果を調べる) 20世紀後半 - 21世紀初期の歴史を読み解く(「仮説 a、b、c」の検証)。

2) 具体的には、構造的な危機を象徴するハード/ソフトの「空き」の発生過程を歴史的に追跡し、次に「空き」が如何に再生に有用な都市資源に転換されるようになったか その変遷を、それぞれの時代を担った都市社会システムと比較考察しながら明らかにする(「仮説 d、e」の検証)。

3) リーマンショック以降、南欧の縮小都市は厳しい財政運営を迫られている。同時に、EUの新予算年度(2014 - 20年)では、財政支援(構造基金)の削減に直面する。金融財政危機下、トリノのこれまでの「成功モデル」は今後、どのように変容していくのか、その資金調達面にも関心がある。

4) 理論仮説の検証素材としてトリノを事例研究都市に取り上げるが、その際、デトロイト研究で得た知見とよく比較し、トリノ/デトロイトの都市再生を育む都市社会システムを相対評価する(「仮説 e」の検証)。そこに本研究の優位性がある。

### 3. 研究の方法

「トリノ再生」の調査領域を、1)フォーディズム型都市構造からの転換を目指す「大規模都市再開発プロジェクト地域」、2)衰退するコミュニティの再生プロジェクト地域」に区分/整理し、1)を2014年度、2)を2015年度調査研究地域とする。最終年度に、調査研究の成果を付き合わせ、「トリノ再生」の全体像を描き出す。研究期間を通じ、1)+2)のプロジェクトとして実装化されることになった再生計画

(「戦略プラン」それを具現化した「都市マスタープラン」)の策定過程を調べ、だれが策定に参加し、如何に実行部隊が形成され、実施されてきたか すなわち、各プロジェクト現場でどのような「都市社会システム」が構築され、機能してきたのかを現地調査する。研究班の学際性を生かし、専門領域を深耕、隣接領域との協働の重奏を目指す。旧知のトリノ工科大学空間計画研究室との連携研究を視野に据え、研究会の開催、協働調査に取り組む。

### 4. 研究成果

以下の知見を得ることができた。その成果を書籍にまとめ、発刊することができた。

1) 同じ自動車産業依存型の旧煤煙都市だが、トリノとデトロイトとの都市再生のパターンの違いを浮き彫りにした。すなわち、トリノでは都市政府が再生を先導し、これにEUやイタリア政府が加担し、大学、民間基金、民間企業が関わる、という公共先導の「かたち」であった。これに対しデトロイトでは、民間=市場先導の「かたち」に特徴があった。背景には、デトロイト市の財政破綻、連邦政府の都市政策からの縮退 などがある。

2) 都市再生には、結局、その都市の寄って来る環境(歴史)、換言すれば歴史的遺産(Historical Legacy)を如何に活用するかが、大きな意味を持って来ることを理解できた。トリノの場合、歴史的環境(工場、倉庫などの産業遺産)を新産業の苗床にすることで都市再生のきっかけづくりをしてきた(煤煙工場 ショッピングモールや大学キャンパス、大規模倉庫 現代アート美術館)。

3) 歴史的遺産の活用は、2)に述べたように物的、建築的な条件に限らず、FIATの技術者がスピノフシ、トリノ工科大学などと連携し、新しいベンチャーを育てる事例などにも、そうした傾向を観察することができる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)[雑誌論文](計9件)

矢作弘「財政破綻から3年 デトロイトの最新事情 「先端」と「異端」のはざ間で急進展する都市再生」『世界』2017年1月 890号 p.122-131 査読無

矢作弘「持続可能な地方都市の「かたち」都市圏内で協働/連携を希求する」『リバーバック リポート 2016年秋号 15号 p.4-5 査読無

矢作弘「ポストフォーディズムの都市空間開発 トリノの Spina Centrale を歩く」『社会科学研究年報』(龍谷大学社会科学研究所 2016年5月 p.103-114 査読無

矢作弘「ジェントリフィケーションを考える - 都市再編過程にあるトリノを事例に」『龍谷政策学論集』5巻2号 2016年3月 p.91-119 査読内

和田夏子「産業転換による工場転用と地域

の活性化」 地域開発 611号 2015年  
pp.62-65 査読無

松永桂子「ポスト産業都市に芽生えるス  
モールビジネス」地域開発 610号 2015年  
pp.55-68 査読無

清水裕之「モーターシティ、トリノの最新  
事情報告」;コロナ・ヴェルデ(戦略的  
景域計画)」地域開発 609号 2015年  
pp.48-52 査読無

大石尚子「未来を拓くソーシャル・イノベ  
ーション;欧州連合戦略と社会的起業」地域  
開発 608号 2015 pp.67-71 査読無

矢作弘「具現化してきたポストフォーディ  
ズムの都市風景」地域開発」2015年4-5月  
号 607号 p.64-66 査読無

〔学会発表〕計 2 件)

H. Yahagi, "The Miracle of Torino" at  
Politecnology of Torino April 3, 2017

H. Yahagi, "Shrinking Cities in Japan;  
Challenges of Depopulation Society", at  
National Taiwan University Jan. 10 2015

〔図書〕(計 1 件)

矢作弘 / 岡部明子 / 白石克孝 / 清水裕之  
「 / 松永桂子 / 大石尚子 / Bolzoni / 和田夏子  
『トリノの奇跡-「縮小都市」の産業構造転  
換と再生』(藤原書店 2017年) p.264

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

矢作 弘 (YAHAGI Hiroshi)

龍谷大学・政策学部・特任教授

研究者番号: 40364020

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

白石克孝 (SHIRAIISHI Katsutaka)

龍谷大学・政策学部・教授

研究者番号: 80187517

大石尚子 (OISHI Naoko)

龍谷大学・政策学部・准教授

研究者番号: 20725361

清水裕之 (SHIMIZU Hiroyuki)

名古屋大学・大学院環境学研究科・教授

研究者番号 30187463

岡部明子 (OKABE Akiko)

東京大学・大学院創成額研究科・教授

研究者番号 70361615

松永桂子 (MATSUNAGA Keiko)

大阪市立大学・大学院創造都市研究科・准教  
授

研究者番号 20405476

和田夏子 (WADA Natsuko)

東京大学・大学院創成学研究科・研究員

研究者番号 30648176

### (4) 研究協力者

( )